

新編

國語讀本

尋常小學校
兒童用

卷四

福岡縣立師範學校

圖書部

國語部

冊數

番號

八

架

號

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 8 0 3 6 a

福岡教育大学蔵書

T1A3

10

Ko97j

小山左文二合著
武島又次郎

新編 國語讀本 尋常小學校 兒童用

東京 株式會社普及舎

新編 國語讀本 尋常小學校 卷四 目次

だい一	わが家	一
だい二	うぢがみ	三
ダイ三	アキノ山	五
だい四	天ちよーせつのうた	九
だい五	くわんぺいしき	十二
ダイ六	キクノ花	十五
だい七	つき山	十八
ダイ八	次郎ノ車	二十
だい九	ままごと	二十三
ダイ十	炭	二十七
だい十一	シホバラタスケ	二十九
だい十二	シホバラタスケ	三十一

だい十三	お月さまとさる	三十五
ダイ十四	オセイボ	三十八
だい十五	年の始	四十二
だい十六	とけい	四十五
だい十七	小川タイザン	四十八
ダイ十八	雪ガッセン	五十一
だい十九	いくさのどーぐ	五十四
だい二十	かんしんな小むすめ	五十七
ダイ二十一	ヲロチタイヂ(一)	五十九
ダイ二十二	ヲロチタイヂ(二)	六十二
だい二十三	めくらとちんばのかはわたり	六十七
だい二十四	三月三日	七十
だい二十五	じこー	七十二

新編 國語讀本 尋常小學 校兒童用 卷四

だいい わが家

古

わが家は古い小さい家ではありま
すが、われらはどこの家よりもよい家
であるとおもつて居ます。

等

我

父母は大そー、われ等きよーだいを、
かはゆがつてくださいます。我等は、犬

舌



のカメを、かはゆ
かります。

よるは、みなあ
つまつて、舌きり
すずめや、桃太郎
のはなしをして、
おもしろくあそ

びます。

我等は、まい日、がつこーからかへる

足
とき、わが家が見えると、うれしくて、足
が、おのづと、早くなります。

だいニ うぢがみ

宮
このお宮は、我等のうぢがみであり
ます。鳥居をくぐつて、石だんを上ると、

お宮の前のはい
でんには、へいたい

などの急まが、かかつて居ます。

おまつりは、春とあきにあります。今
に、あきまつりがきます。

ダイ三
アキノ山

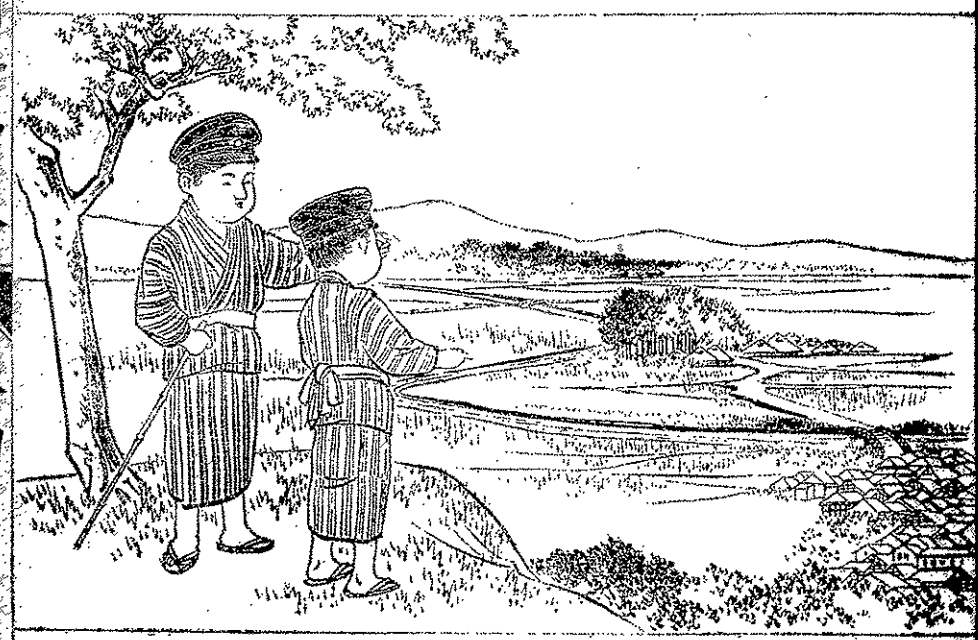
アル日、松太郎ハ、第ヲツレテ、チカク

六二會社ニヤノ名鼎片

ノ山ニノボツタ。

村 町
松太郎ハ山ノ一バンタカイトコロ
ニノボツテ「アレハウヂガミノモリデ
アル。モリノソバニ、家ガカタマツテ見
エルノハ、ワガ村デアル。アレ、古杉村ヘ
ナガレル川モ、大宮町ヘエクミチモ、ア
ノトホリニ見エル。」ト第二ヲシヘタ。

秋



コノ山ノ秋ノケ
シキハ、マコトニヨ
イ。アカイモミチト
アヲイ松ガ、イリマ
ジツテ居ル。ソノヨ
ースハ、エニカイト
ヨーデアル。

二人ハ、クリヲヒロツタリ、キノコヲ
トツタリシテ、オモシロク、山ヲアソビ
マハッタ。



レンジャーダイー

アノ杉バヤシノ中ノ古イ宮ハ、
ワガ村ノウデガミデアリマス。
我等ハ時々、オマキリヲイタ
シマス。



あすは、わが村の秋
まつりでございます
ゆゑ、弟さまをつれて、
おひる前から、おあそ
びにお出で下さい。

九月二十五日 古山松次

前川春一さま

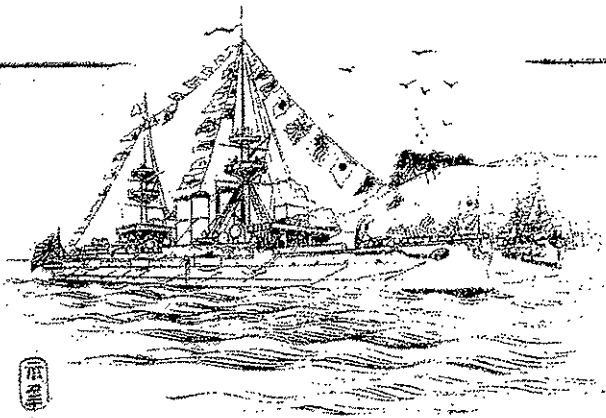
だい四 天ちよーせつのうた

朝



けふは十一月三日の朝よ。
朝日にかがやく日の丸の
みはたはかどなみ
ひーらひら。
みはたはかどなみ
ひーらひら。

海



今は十一月三日のひるよ。
をかでも海でもいさましく、
うちだすしゆくほーとんどとどん。
うちだすしゆくほーとんどとどん。
今日のよき日はどういふいはひ、
みかどのお生れあそばした、
その目のいはひよやよやや。
天ちよーせつよやよやや。

代君

だい五 くわんぺいしき

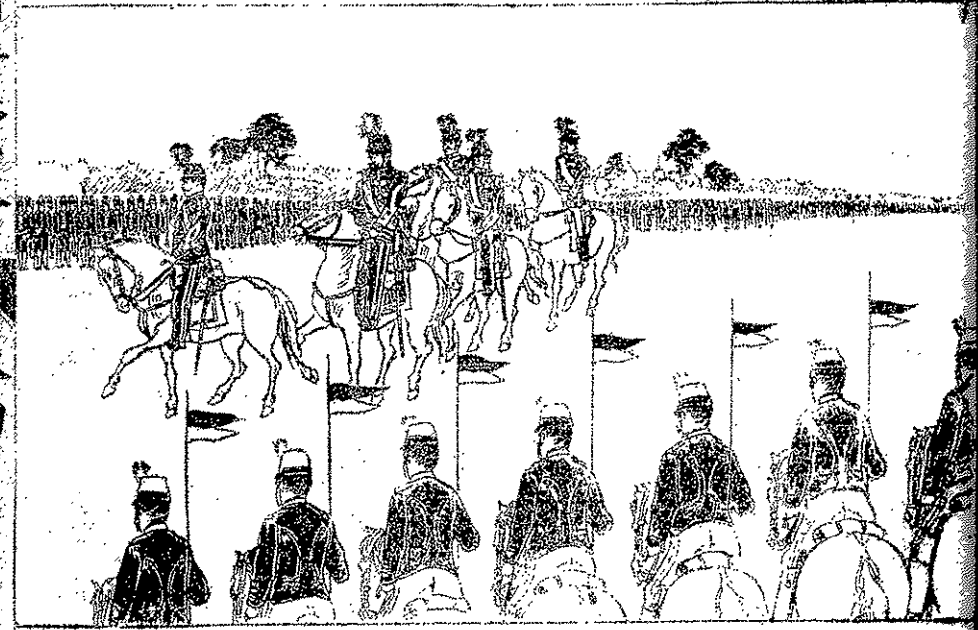
にはかにおこる「君が代のらっぱの
ひびきに、あを山れんぺいじょーはし
づまりかへりました。

もったいなくも、天皇へいかは、

御

御馬にめされて、立ちならんでゐるへ
いたいの前を、おまはりなされました。

始



御をばちかいと
ころから、がくたい
のおんがくが始ま
りました。

あれ、今、へいたい
はいくつかのれつ
にあかれて、じゅん

じゅんに、天皇へいかの御前をとほります。

ひかひかと朝日にかがやくけん。
ひらひらと、風になびくはた。
いなく馬。ごーれいのこゑ。
あなんと、りっばではありませんか。
なんと、いさましいではありませんか。

ダイハ キクノ花

菊

キレイニ、菊がサキマシタ。オオ、リッ

パナコトヨ。

色

ソノキ色ナ菊

ヲゴラン。ナント、

大キナ花デハア

リマセンカ。



白

チヨツト、コチラノ白イノヲゴラン。
ホンニ、マリノヨーデアリマス。

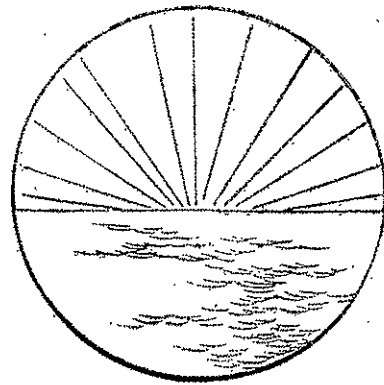
赤

アレ、ムカウニハ、赤イ菊ガ、手ヲニギ
リカケタヨーナカタチヲシテ居マス。
マア、ヨイニホヒガシマスコト。
私ハ、菊ノ花ガ、バンスキデアリマス。
私モ、バンスキデアリマス。

れんしゅーだいニ、

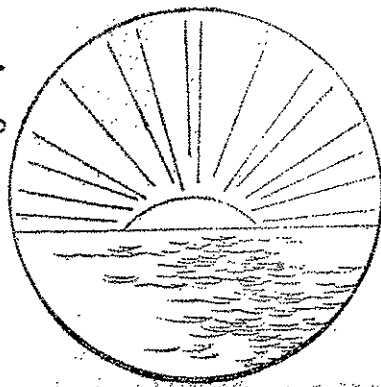
海の日の出は、まことに、りっぱで
あります。

始めは、水と天のさかひから、白い
ひかりがあらはれます。



赤いぼんのようなかたちの
お日さまが、まもなく、なみの
上にのぼります。

あたりのなみは、金色にひかります。



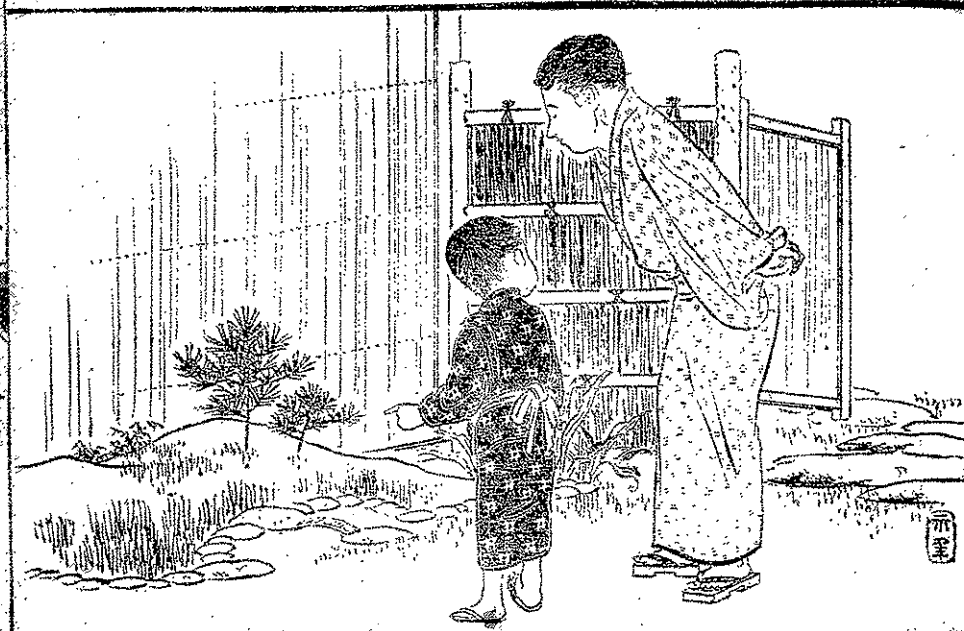
だい七 つき山

一郎はきのふとなりの菊次の手つだひをして、つき山の草とりをした。

そのとき、一郎は菊次の父から、小さい松を二本もらった。

土
一郎は、けさからはのすみで、土や小石などをいちつつて居た。

やがて、一郎は父の前にいって、「私のこしらへたつき山を見てください。」といった。
父は、にはに出て、
「どうもよいつき山



新田言言二 卷四 二十 金部言言二 非片
だことさうして、まあこんなよい松が、
どこにあつたか」とたづねた。

一郎は、「この松は、菊次さんのおとつ
答さんからもらひました」と答へた。

ダイハ 次郎ノ車

次郎ハヒキダシカラ、コハレカカッ
タマゲモノヲ見ツケ出シマシタ。

「オマヘニ、ソレヲヤルカラ、ナニカ、コ
シラヘテゴラン。」トヂヂガイヒマシタ
カラ、次郎ハ、ヨロコンデ、ソレヲ、エンサ
キニモツテユキマシタ。

次郎ハ、マゲモノヲコハシテ、フタト
ソコノマン中ニ、アナヲアケ、古イ小フ
切
デノヂクヲ切ツテ、ソノアナニサシコ

三マシタ。

次郎ハ、コノ車ノ

板

ヂクニ、小サイ板ヲ

ノセ、ウラカラクギ

ヲウツテ、スベリオ

チヌヨーニシ、マン

ジューヲノセテ、

行

ヂヂノトコロヘモツテ行キマシタ。

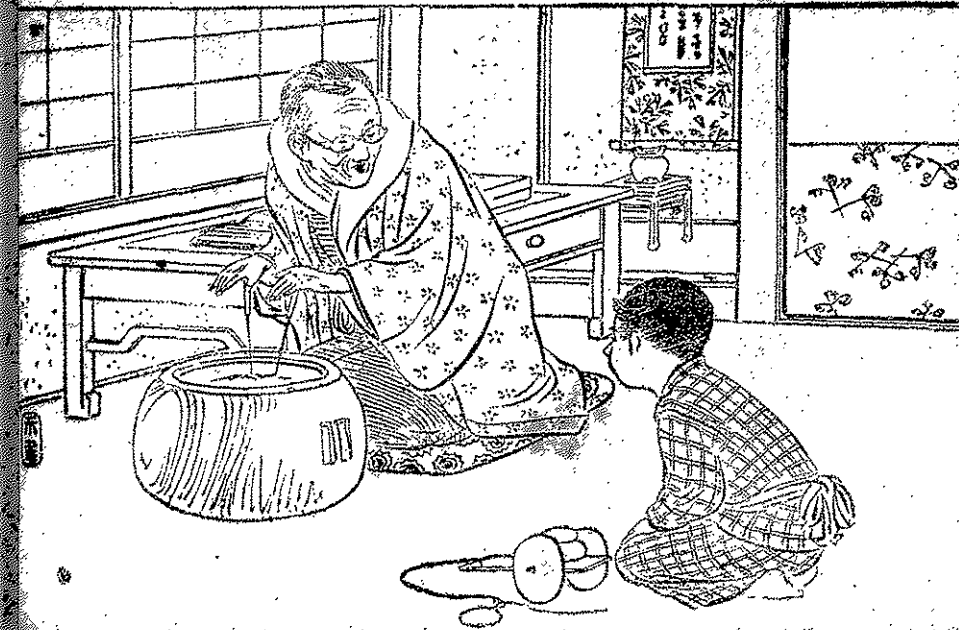
ヂヂハ、「オオ、ヨイ車がデキタコト。」ト

イッテ、ホメマシタ。

だい九 ままごと

妹

オ春は、妹のオ秋と、おもちゃのなべ
などをとり出して、ままごとをはじめ
ました。



才春は、だいこん
入をきつて、なべに入
れ、才秋は、セリんに
すみを入れて、火を
おこすまねをしま
した。

才秋は、ふと、おも



紙

ひついて、「ごはんをあげたいから、すぐ
に、きてください。」といふ手紙をかいて、
となりのオフエにやりました。
オフエは、すぐにきて、「今日は、ありが
たうございます。」とあいさつしました。
それから、三人で、夕方まで、おもしろ
くあそびました。

レンシューダイミ



太郎ハ板切レト竹クギデ、船
ヲコシラヘ、紙ノホヲアゲテ、
ニハノセンスイニ、モチ行キマ
シタ。

アネノオ君モ、妹ノオ菊モ、見ニキマシタ。アネハ、
太郎ノ船ノ中ニ、小サイ土ニシギョーヲ入レテ
ヤリマシタ。

ダイ十 炭

炭

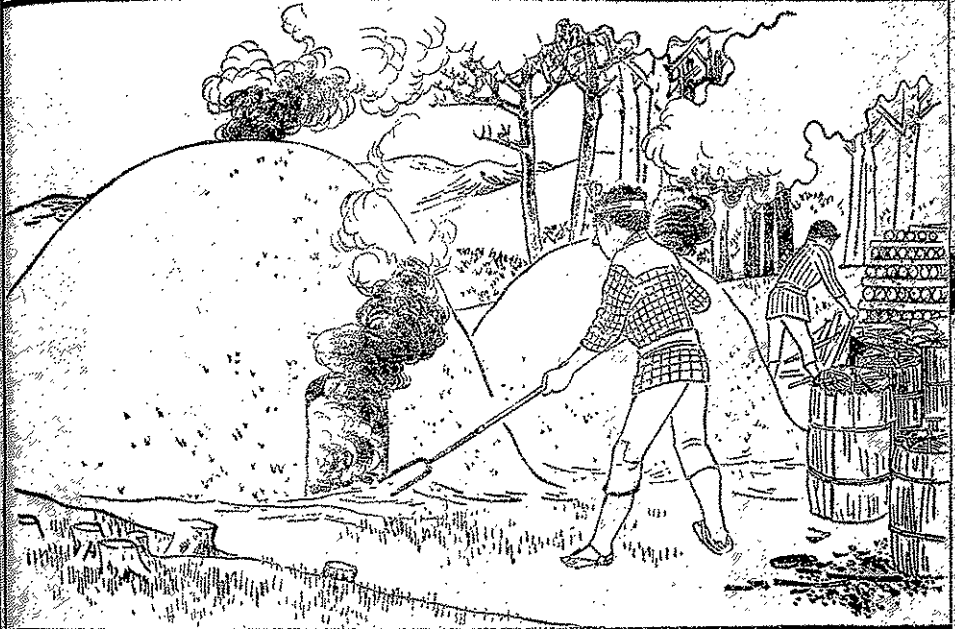
炭ヲコシラヘルニハ、ナマ木ヲヨイ
ホドノナガサニ切り、炭ガマノ中ニツ
ミカサネテ、シバラク、モヤシマス。

ロ

ソレカラ、カマノロヲフサイデ、上ノ
アナカラ、ケムリバカリガ出ルヨーニ
シテオキマス。

間

火



二三日ノ間、サウ

シテオクト、木ハカ

マノ中デ、ムシヤキ

ニナリマス。

ソレカラノチ、上

ノアナモフサイデ、

火ヲケシマス。

サウスルト、カマノ中ニ、タクサンノ
炭ガデキマス。

たい十一 シホバラタスケ

心

昔、シホバラタスケといふ心がけの

よい人がありました。

タスケは、びんぼーな家に生まれまし

思
たが、どうかして、金持になりたいと思

つて、ある炭どひや
の小ざーになつて、
主よく、主人のために、
はたらきました。
タスケは、ほーこ
ーして居るうち、古
どーりや、炭くづを



ひろひあつめました。さうして、どーり
は、はかれるよーに手入れをし、炭くづ
は、俵につめて、しまつておきました。

だい十二 シホバラタスケ

ある日、タスケは、主人から、「どーりを
買ひ入れよ。」といひつけられました。
その時、タスケは、しまつておいた古

用



ぞーりを、山ほど、主人の前に出して、これでは御用に立ちませんか。」と、まうしました。

主人も、店のものも、みな、タスケの心が

けのよいのに、かん心しました。

そののち、タスケは、じぶんでためた

屋 炭くづで、炭屋をはじめました。

タスケは、しょーぢきな上に、しょー

ばいにせいだしましたゆゑ、その店が、

はんじょーして、ぢきに、大きな炭問屋

となりました。

問

レンシューダイ四

心ハスナホデナクテハナリマセン。

口ハツツシマネバナリマセン。

ワカラヌコトハ、問ハネバナリマセン。

シツテ居ルコトハ、答ヘネバナリマセン。

ナンギナモノヲ、メグマネバナリマセン。

火ハ、用心セネバナリマセン。



アレ、山ノ間カラ、ケムリガノボリマス。
アレハ、炭ヲヤイテ居ルノデアリ
マセウ。

だい十三 お月さまとさる

様

お月様が、東の山に出かけますと、

さるは、これをとらうとして、かけ出し

ました。いつて見る

と、お月様は、もはや、

天にのぼって居ま

した。



高

そこで、さるは、高い木にのぼったが、とても、お月様には、手がとどきませんでした。



さるが、ざんねんがって、木から下りかけますと、お月様は、池の中で、ぴか

ぴかとひかって居ました。

さるは、あれ

ならとれようと思つて、

池の中へとびこみました。すると、お月



様は見えなくなつてしまひました。

さるは、およぎをしらないから、大を

岸
一、水をのんで、やうやう、岸にはひ上り

ました。その時、お月様は、西の山に入り

かかつてゐました。

ダイ十四 オセイボ

月日ノタツノハ、早イモノデ、モハヤ、

コトシモ、ワヅカナ日カズニナツタ。

ススハキヤラ、モチツキヤラ、松カザ

正
リヤラ、色々、正月ノヨーイデ、ドコノ家

モ、イソガシサウデアル。

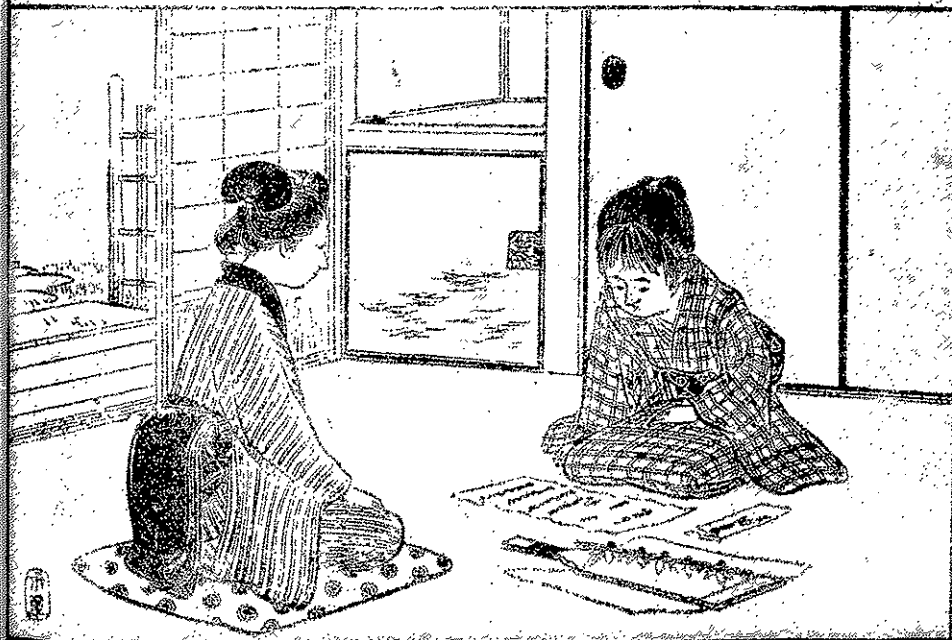
使
おかね、母サマ、今、ヲバ様ノ御使ガ、コ

ノシナ物ト、オ手紙ヲ持ッテ來マシタ。

讀
母、「ソノオ手紙ヲ讀ンデゴラン。」

おかね「ハイ」。
このはご板とは
ねは、なまつであ
りますがおせい
ぼのしるしに、上
げます。

十二月二十五日をば



おかね様

書
品
母ハ、おかねニ、次ノ手紙ヲ書カセテ、
使ニワタサセマシタ。

ただ今は、けっこーな御品を下さい
まして、ありがたうございます。

十二月二十五日

かね

をば様

だい十五 年の始

待

まい日、待ちに待って居たお正月も、
今日は、いよいよ来た。

今日は、さらもはれ、風もしづかで、小鳥
のこゑも、おもしろくきこえる。

正一は、をぢの家について、「あけまし
ておめでたうございます」といった。

取



をぢは、「おお正
一か、おめでたう。
大そー、かしこく
なったね」といっ
てほめた。
だれも、一つづ
つ、年を取ったの

であるから、正一のよーに、かしこくな
らねばなりません。

レンシューダイ五



正一ハ、本ヲ讀ンデ
居マス。
才高ハ、書キ取リヲ
シテ居マス。

岸田ノヲヂ様カラ、工本ヲ下サイマシタ。
マダ、使ハ、待ッテ居マスカ。
オレイヲイハネバナリマセン。

けっこーな品をありがたうございます。
をぢ様によろしくいつて下さいませ。

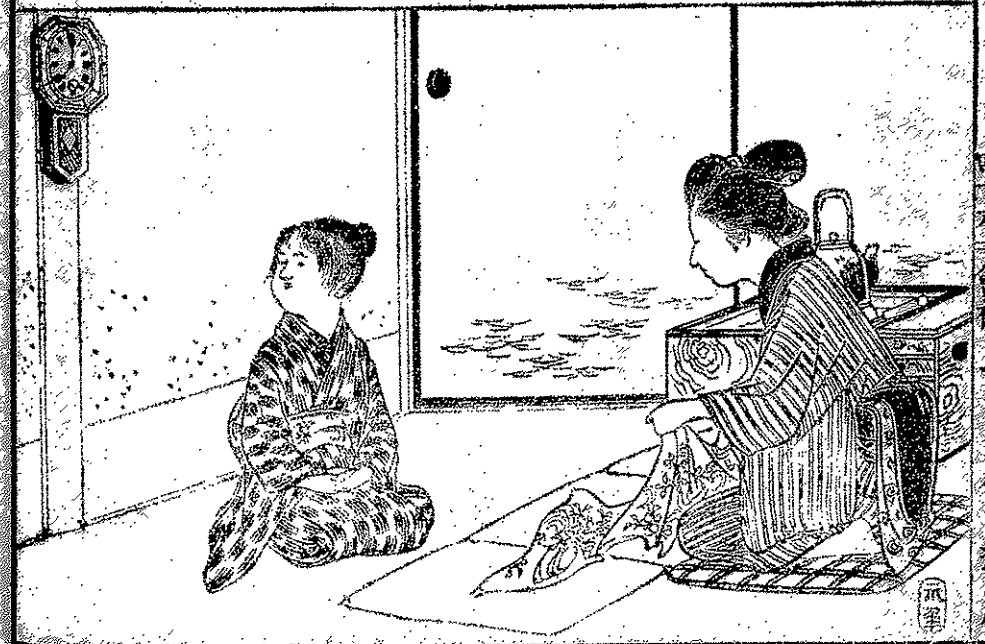
だい十六 とけい

計
才時は、はしらに掛けてある時計を

針

見て、「母さま、時計の針は、なぜ、ひとりでまわりますか。」と問ひました。

母「それは、きいかし、かけてあるからであります。」



術算

才時「そんなら、あのかちかちいふのは、なにのおとでありますか。」

母「あれは、中のきいかいのうごくおとであります。」

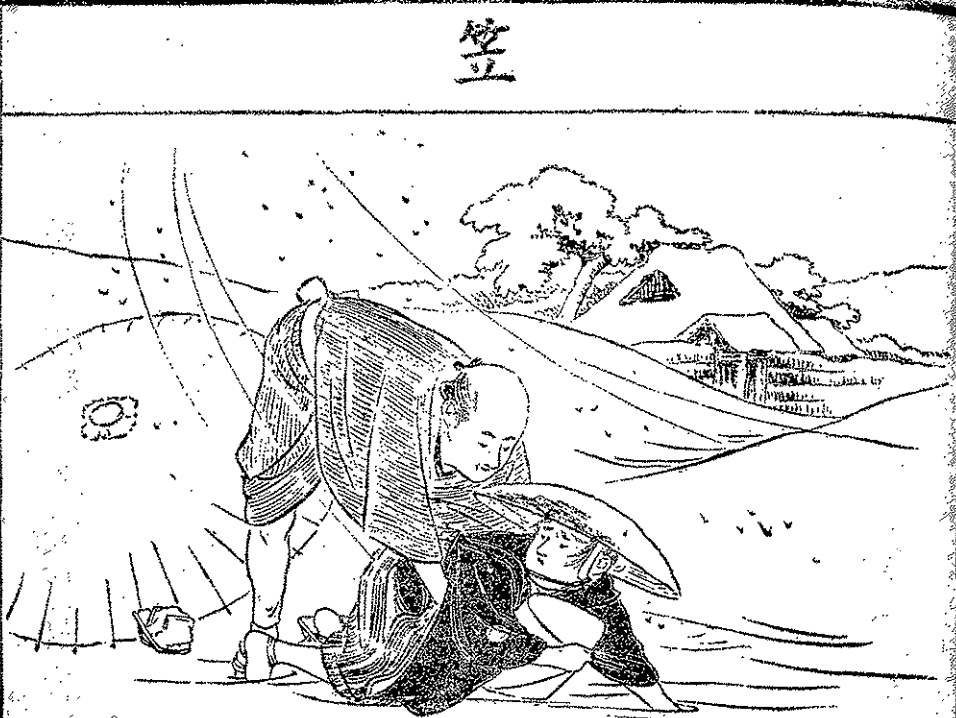
このついでに、母は、才時に、「あの時計の、たえ間なくまはるよーに、せいだして、べんきよーすると、読み方でも、算術

でもよくできるよーになりますぞ。と
をしました。

だい十七 小川タイザン

小川タイザンといふ人は、ちひさい
時から、學問にせいだしました。

雪 學
ある日、大そー、雪のふるのもかまは
ずに、大きなかさをかぶつて、せんせい



笠

のうちへ、けいこに
出かけました。
みちがわるいの
と、笠の雪がおもい
のとで、タイザンは、
とーとー、たふれて、
けがをしました。

五十一 會社
そこをどほりかかった人が、タイガ
ンをだきおこして、「今日は、もう家にお
かつりなさい。」とすすめました。

けれど、タイザンは、やすみたくない
先ゆゑとーとー、先生の家にゆきました。
タイザンは、かよーに、べんきよーし
ましたので、十五六のころにもはや、名

高い學者になりました。

ダイ十八 雪がッセン

「サア、始ッタ。カッセンダ。大ガッセン
ダ。川ノ西東デ、雪ガッセンガ始ッタ。」ト
イフコエガ聞コエタ。

太郎モ、次郎モ、コノコエヲ聞イテ、キ
チガヒノヨーニ、トシデ出タ。

銀

雨



大シヨ一ハダレ

ダラウ。オオ、東ハ銀

ゾ一サシデ、西ハ金

太郎サンダ。

アレ、西デハ、テッ

ポーダマノヨ一ナ

小サイ雪ダマヲ、雨

アラレノヨ一ニナゲダシタ。

ソレ、東カラハ、大ホ一ノタマノヨ一ニ

大キナ雪ダマヲナゲダシタ。

アレ、東ニ、トキノコエガアガツタ。

ヤア、西ノ大シヨ一ガ、グンゼイヲヒ

キツレテ、川バタヲ、北ヘカケ出シタ。

アレ、橋ヲワタツテ、東ニセメヨセタ。

橋

オオ、東ノグンゼイハクモノ子ノチ
ルヨ一ニ、ニゲテシマツタ。

オモシロイ。 オモシロイ。

れんしゅーだい六

時計の針は、ひるでも、よるでも、やすまずに
まはります。

私等は、雨がふっても、雪がふっても、おこたら
ず、が、こーにかよひます。

金や、銀などのよーなたからをたくさんもつ

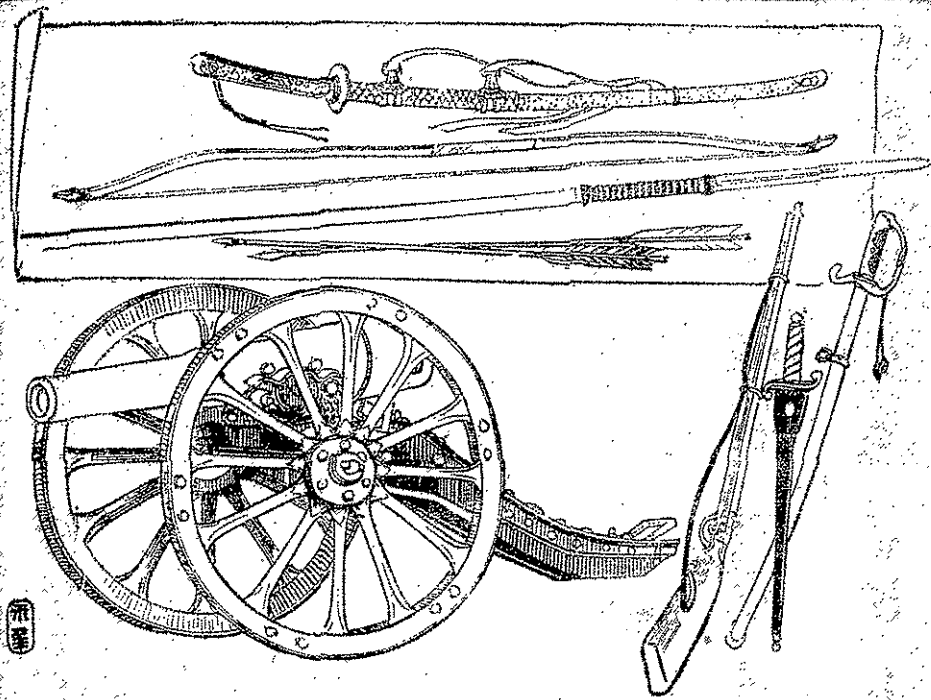
て居ても、読み書きや、算術などのでき
ない人は、なにのやくにも立ちません。

だい十九 いくさのどーぐ

いくさをするのに、入用などーぐは、
大ほーてっぽー！けんなどである。

いくさのかちまけは、いくさのどーぐ
のよしあしによることがおほい。

刀矢弓



今ではこれ等のいくさどーぐをつかふけれど昔は弓矢やり刀なぎなたなどいくさをしたものである。

夜

だい二十 かんしんな小むすめ
昔大さかといふまちにト三といふ女の子がありました。
ある夜三人のぬすびとがト三の家にはひりました。
ト三の母は、すゑの子をだいてどこへか、にげて行きました。

そこでぬすびと
は、ト三の兄をつか
まつて「錢を出さぬ
と、いのちがないぞ。」
とおどしました。
ト三は、じぶんが、
もらひためた錢を、



ぬす人の前に出して、「これを上げます
命から、どうぞ、兄様の命をたすけて下さ
い。」と、なくなつたのみました。

さすがのぬす人どもも、大それかん
心して、一品も取らず、立ちさりました。

タイ二十一 ヲロチタイヂー
ムカシ、スサノヲノミコトイフツ

ヨイカミサマガアツテ、アルカハバタ
ヲオトホリニナツタ

スルト、チヂトババガ、ヒトリノムス
メヲダイテ、ナイテキタカラ、オマヘタ
チハナゼナクカ、トオタツネニナシタ
ヂヂババハ、ワタクシラニハ、ハニン
ノムスメガアリマシタガ、アタマガヤツ

ツ、ヲガヤツツノヨ
ロチニ、マイネン、ヒ
トリツツノマレテ、
イママタ、コノムス
メモ、ノマレルジセ
ツニナリマシタカ
ラ、トマウシタ。



スサノヲノミコトハ、ヨシヨシ、シン
パイスルナ、ワレガ、ソノヲロチヲタイ
ヂシテヤラウ。トオホセラレタ。

ダイニ十二 ヲロチタイヂ (二)

スサノヲノミコトハ、イロイロト、オ
カンガヘニナツテ、ヤツツノカメニ、サ
ケヲイッパイイレ、ムスメヲタカイト

コロニオイテ、ソノカゲガ、サケニウツ
ルヨーニシテ、ヲロチメ、サア、イツデモ
コイ。ト、マツテオイデニナツタ。

シバラクスルト、ヤマノホーカラ、ヲ
ロチガ、ホホヅキノヨーナメダマヲヒ
カピカヒカラセテ、デテキタ。

ヲロチハ、サケトハシラナイデ、ムス



メノカゲヲミテ、イ
 キナリ、ソレヲノン
 ダスルト、タイソー
 ヨツテ、ソバニタフ
 レテシマツタ。
 スサノヲノミコ
 トハ、ゴヨゾトケン

ヲスイテ、オススミナサツタ。ヲロチハ
 メヲムキダシテ、タイソー、アバレマハ
 ツタガ、トートー、ズタズタニキラレタ。
 ムスメハ、タスカツタ。ヂヂババハ、ヨ
 ロコンダ。スサノヲノミコトハ、ヲロチ
 ノヲカラ、タフトイケンヲオトリナサ
 ツタトイフコトデアリマス。

れんしゅーだいセ

刀は、よくても、とがねばきれん。
やまひは、おほく、口からはひる。
始め、くるしんで、すゑにたのしめ。
君のためには、命ををしむな。

月日のたつのは、矢のよーなものである。
一どきつたら、もう、かつつてはこない。

だい二十三 めくらとちんばの

かはわたり

ある時、めくらとちんばが、川のはた
で、一しよになりました。

目 めくらは、目が見えませず、ちんばは
足がかなひませんから、どちらも、どう
したら、この川が渡られようか、こまつ
渡

たことぢや。」といつて居りました。

しばらくたつて、ちんばがいひます
には、「私は目は見えますが足がかなひ
ません。あなたは、お目は見えませんが、
お足がたつしやであります。それゆゑ、
私がおはれて、浅い
ところをさしづして、この川を渡つた

らどうでせうか。」と
申しました。

めくらは、「それは、
よいごふんべつで
あります。」といつて、
ちんばをおうて、何

事
事もなく、この川を渡りました。



祭

だい二十四 三月三日

三月三日は、ひな祭。

上のだんには、だいらびな。

下のだんには、矢大臣。

五人はやしや、しほくみや。

どれもやさしく、かはゆらし。

前にとなつた品々は、

臣

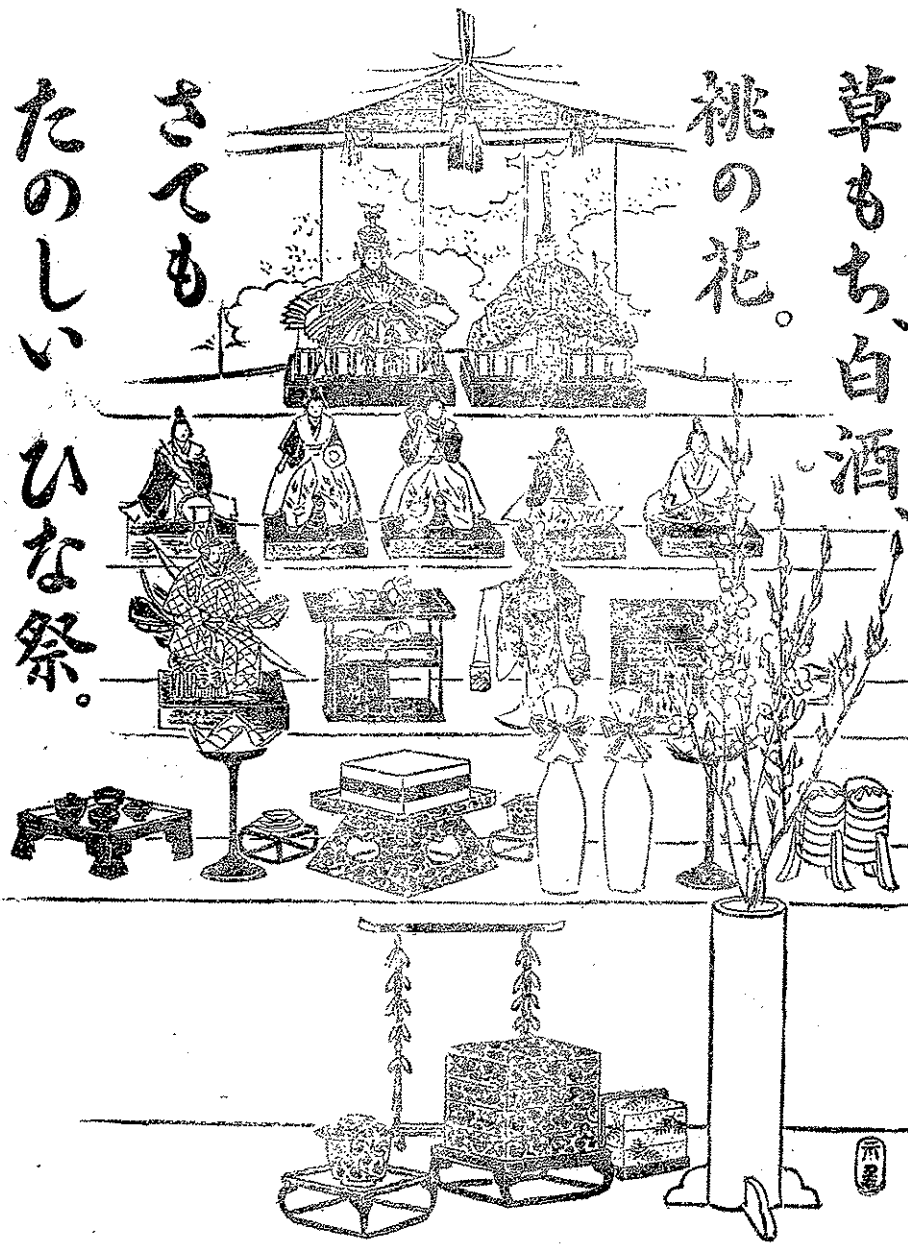
酒

草もち、白酒。

桃の花。

さても

たのしいひな祭。



だい二十五 じこー

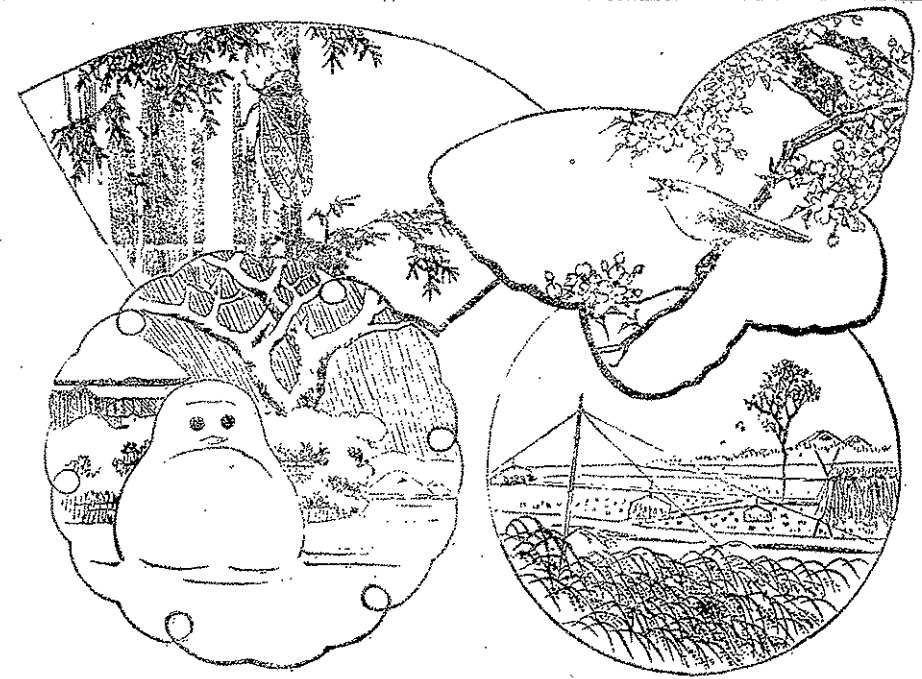
じこーは、一年のうち、に、四たびかはります。

三月・四月・五月を、春といひます。春は、あたたかいから、いろいろの花もさします。又、鳥もうたひます。

夏
六月・七月・八月は、夏であります。夏は、

あつさがつよく、
青草木が青々とし
げります。

次にくる九月・
十月・十一月のす
ずしい時を、秋と
いひます。秋は、木



十二月から、次の年の二月までの大
冬をさむいじこいを冬といひます。

八ノ外

春・夏・秋・冬トスギサツテ、マタ、モトノトホリ、
春ガマハツテキタ。木ノ葉ガ青々トシゲルノ
モ、モウ、デキデアラウ。

をばり

T/A 3
10
Ka 97

七十四 會社 音乃令痛片

明治三十四年六月廿五日印

同
年六月廿八日發

明治三十四年八月四日訂正再版印刷
同 年八月八日訂正再版發行

新編國語讀本尋常科

定價	
甲種卷一	一八錢
乙種卷一	九錢
卷二	十錢
卷三	十錢
卷四	十一錢
合計	金九十九錢

著者 小山左文二

著者 武島 又次郎

東京市日本橋區吳服町壹番地

發行者 印刷者 株式會社普及舍

右社長

代表者 山田 禎三郎

日六十月八年四十三治明
濟定檢省部文

不許複製

發賣所

東京市神田區南乘物町十番地

帝國書籍株式會社

